

みの EDO

東京 笠原情報誌 MAIL版

モザイク展2025

モザイク会議設立30周年

9月3日(水)～15日(月)、横浜市民ギャラリーあざみ野(神奈川県横浜市青葉区)にて、モザイク展が開催された。主催は、モザイクアートの普及、発展を目的とするモザイク会議。同会議が今年発足30周年を迎えることを記念し、これまでの軌跡をたどる展示も行われた。

写真:小林正(一部を除く)



AMBIVALENCE2509

森 敏美

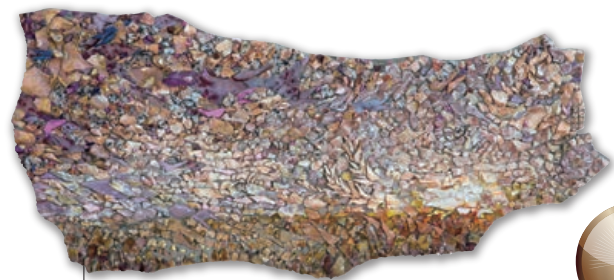
象をモチーフとし、地球環境への問題意識を込めた。「迫ってくる象に緊迫感が感じられる」「一席にふさわしい存在感と完成度がある」と高評価を得た。



雨の日 晴れの日

平田恵利子

複数のモザイク作品を組み合わせた作品。
「作品の配置にもリズムがあり、物語性を感じさせる」と講評。



Start Of The Day

若月弓枝

幻想的な空や目に見えないエネルギーをイメージした。
「二度三度と、見ることでいろんなものが見えてくる」と講評。

すべての作品を講評

モザイク展は、隔年で実施される公募展で、第16回目となる今回は、41名の出展者があった。1階の会場には、大理石やガラス、陶片、タイルといった様々な素材、技法を用いた作品が並んだ。サイズと重量に制限はあるものの、形や素材に決まりはなく、立体や何点かを組み合わせた作品もあり、モザイクの自由で多様な表現に驚かされる。

応募作品の中から、一席～三席、佳作等を選出。9月6日の午後、審査員による講評会と表彰が行われた。一点ずつすべての作品を順番に回り、審査員がコメントしていく。作者の励みとなるだけでなく、鑑賞者にとっては細やかな工夫や技巧、見所や魅力に気づくことができる。



講評会の様子。
審査員は、藤井雅実さん(美術評論家)/土方明司さん(川崎市岡本太郎美術館館長・武蔵野美術大学客員教授)/服部真歩さん(多治見市モザイクタイルミュージアム学芸員)/相澤昭郎さん(名古屋モザイク工業株式会社取締役)



賞状を受け取る
大賞の森さん(左)



2025年の日記
元日から祖父の納骨まで

飯野夏実

小さなモザイクに日々の記録を添えた
日記風の作品。

タイルを使った
作品も！



オカメなインコ達
土屋忠宣



音楽と猫のない人生はない
河原拓巳



立体作品が並ぶ2階会場。昨年、アートコンプレックスセンター（ACT／東京・新宿区）で開催した「モザイクの散歩道」を再現展示した。

結成と時代背景

2階の会場では、モザイク会議の30年の軌跡をたどる展示が行われた。解説によると、設立のきっかけとなったのは、1994年9月に鎌倉で開催された国際モザイクシンポジウムという。国際現代モザイク作家協会（本拠地：イタリア・ラヴェンナ）から、日本でのシンポジウム開催の話を受け、モザイク関係者が資金集めなどに尽力。これを機にモザイクを広め、作品発表の機会となる団体を作ろうという話が立ち上がり、翌1995年にモザイク会議が設立された。

そこには時代背景も大きく関わっていた。モザイク壁画は1964年の東京オリンピックを頂点に数多く制作されたが、1990年代に入ると、バブル景気も終わり、需要も減り始めていた。モザイクを再び盛り立てたいという関係者の思いが想像される。

1997年、東京芸術劇場で第1回のモザイク展を開催。以降は隔年で今回のような公募のモザイク展、その間に有志の展示を開催してきた。

2004～2005年には愛知万博に参加。「捨てられる陶磁器を用いて床モザイクを作る」というテーマを設定し、全国でワークショップを行い、会場に設置する170枚の床パネル（90×90cm）を制作、会場でも立体のオブジェを制作した。また、多治見ではモザイクタイルミュージアムの企画展「世界のモザイク・今」への協力など、様々な取り組みを行っている。

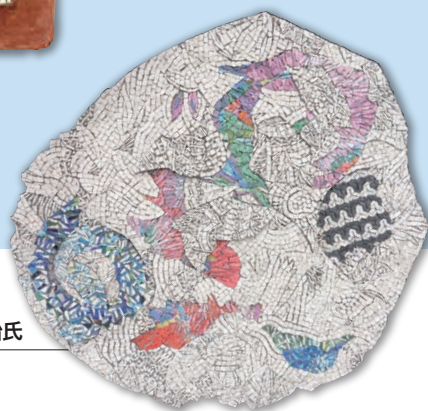


モザイク会議結成のきっかけとなった国際モザイクシンポジウム（1994）のポスター。



宮内淳吉氏

歴代議長の 作品から



喜井豊治氏



橋村元弘氏

モザイクという独自分野を確立したい

これまで着実に実績を積み重ねてきたが、結成当初の目的は達成できたのだろうか。設立メンバーであり、第4代の議長を務めた喜井豊治さんに聞いた。「達成できたことは、次の世代へのバトンタッチですね。それと、展覧会が定着するにつれて、丁寧な仕事の作品が増えたことは成果の一つです」と語った。

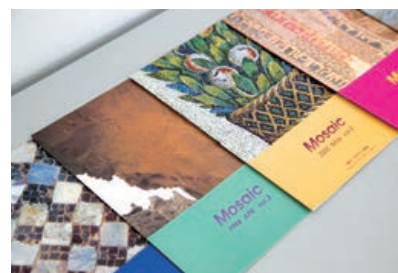
一方、公募展にもっと多くの応募がほしいと話す。モザイクの社会的な注目度を上げることは道半ばというが、「YouTubeを使って展覧会や壁画の紹介をしました。もっといろいろ配信していけば、状況は変わっていくかもしれません」と期待する。

今回、「日本のモザイク壁画と床45選」と題した動画を制作し、会場の一角で上映。東京の作品が多く紹介されていることもあって、意外と身近な建物にモザイク作品があることを知った。動画はモザイクの周知に一役買うだけでなく、貴重な記録にもなる。「全体的に出品作はアートして評価するにはまだ物足りないでしょう」とシビアな指摘をしつつ、「モザイクの注目度が上がれば、他の分野とは違う、モザイクとしての独自の評価が生まれる可能性もあるのではなかるかと、期待しています」と、次なる展開に思いを馳せる。「どのようなピースをどのように組み上げるかが重要です。そこも注目してもらいたいですね」。

結成当時からのメンバーは少なくなったが、若い世代が活動を引き継いでいるのは心強い限り。30年で培ってきた財産を引き継ぎつつ、新たな手法を取り入れながら、日本のモザイクの未来が切り開かれていくことだろう。



これまで開催した展覧会や活動の様子をパネルで紹介。



これまで発行された会報やニュースレター。

YouTubeにて公開中!



モザイク展2025 会場動画

<https://www.youtube.com/watch?v=keHn9q8bOFQ>



日本のモザイク壁画と床45選

<https://www.youtube.com/watch?v=KHUKMEYNW7k>

特別展示

旅するタイルー先駆者たちの足跡ー

2025年 5月24日(土)～9月28日(日)

終了

タイル産業の黎明期にあたる昭和20年代～40年代、
タイルは笠原から全国、そして海外へ広まっていった。
各地に出向いて営業をした人たちや、その方法、道具に注目した。



展 示タイトルの「旅するタイル」は、やきもの業者
の間で、販売営業で各地へ向かうことを「旅に
出る」と表現したことから。当時は、もちろんインター
ネットやメール、携帯電話も存在していない。担当者
がタイルを持参し、直接現地に出向くことに重きが置
かれていた。

昭和30年代までは、交通手段は鉄道がメインで、東
濃鉄道笠原線笠原駅*から出発した。北海道に到着す
るまでに、丸2日がかかったというから、まさに「旅」
だった。持参するのは、様々なタイルを張った見本帳。
ずっしりと重く、肩を痛める人も多かったという。

展示の冒頭では、古びた革製のカバンを紹介。所々
が色褪せて傷んでいるのは、見本帳がぎっしりと詰め
られ、営業担当者と一緒に日本全国、世界を旅してき
た証し。その姿から、旅の昔語りが聞こえてくるよう
で、「ご苦労さまでした」と声をかけたくなった。

興味深いのが、地域ごとに人気のタイルが違って
いたという話。北海道では花柄のタイル、東北や北陸で
は飴釉のタイルがよく売れたのだそう。情報が限られ
ていたため、近所で使われているタイルを見て、気
に入って選ぶこともあったのではないかと想像した。

常設コーナーには、様々なタイル見本帳を展示。商
品名や書体、デザインから、時代性を感じる一方、タ
イルの魅力を伝えようとする担当者の姿が伝わって
くる。タイルを広める方法は時代によって変わって
いくが、その思いはずっと変わらないだろう。



営業担当者とともに
全国を旅した鞆。
革製鞆／昭和38年



地図も旅の必需品。
左は「全国鉄道地図」。



タイルの梱包は、昭和20年代頃ま
では縄で縛っていたが、その後、当
板や針金を使うようになり、昭和
30年代以降は、ダンボール箱の使
用が主流に。

梱包済みタイル／
昭和30年頃(左)、昭和35年頃(右)

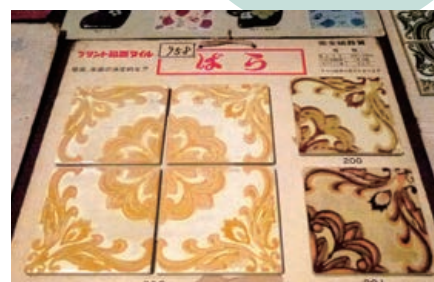


見本帳／各社／
昭和20年代頃以降

タイルを見て、
「なるほど！」と思わせる
秀逸なネーミング。



*昭和3～53年(1928～1978)まで多治見
駅から笠原駅を繋いでいた鉄道路線。旅客
と貨物の両方を運用していたが、昭和46年
(1971)に、旅客営業が終了した。



※所蔵はすべて多治見市モザイクタイルミュージアム



なつやすみ×特別展示関連企画

ワークショップ「発見!きみの見本帳」開催

8月23日(土)、24日(日)



好 きなタイルを選んで、オリジナルの見本帳を制作するワークショップを2階・産業振興エリアで開催。色や形といったテーマを決めて並べたり、ぎっしり隙間なく張ったりと、個性あふれる見本帳が仕上がった。



特別展示

山内逸三と藤井厚二 ー聴竹居で育まれたものたちー

2025年 10月4日(土)~2026年 2月1日(日)

多 治見市笠原町でモザイクタイルの量産体制を確立させた山内逸三。この山内に大きな影響を与えた京都時代を語る上で欠かせない人物が建築家、藤井厚二である。藤井は1928年、木造モダニズム建築の傑作にして2017年に重要文化財指定を受けた平屋住宅、「聴竹居」^{ちようちくきよ}を建て、家族と共に居住。この藤井の元に、当時の山内が出入りしていた。藤井は陶磁器にも並々ならぬ関心を注ぎ、敷地内に窯を築いて「藤焼」と称するやきものを制作した。

本展では、当時の京都で建築陶材の研究や陶磁彫刻の工芸化を牽引した国立陶磁器試験所の存在を背後に見据えながら、山内逸三が戦前に制作した美術タイル、そして本邦初となる、藤焼の中でもとりわけ特徴的な動物の陶磁彫刻を一挙、公開する。(展示概要を抜粋・要約)



百合文レリーフタイル/
山内逸三/1931~35年頃/
多治見市モザイクタイルミュージアム蔵/©小寺克彦



左: 鮑(いたち)、右: 鶉(うずら)
*2点とも 藤井厚二/1935年
以前か/竹中工務店蔵/©小寺
克彦



開催スタート!

関連企画

1

10/4(土)

特別展示開催記念対談
松隈章×藤森照信

時 間: 13:30~15:30

当日はライブ配信を予定。また、後日YouTubeにてアーカイブを公開予定。

*視聴URLは、ミュージアムHPにてお知らせ。

2

11/16(日)

山内逸三のタイルを見に行こう&工場見学
10mmタイルが生まれるところ

時 間: 午前の部

午後の部 14:40~16:00

講 師: 長江優緒(山周セラミック有限公司 代表取締役社長)

定 員: 各回10名

応募受付: 10月8日(水) 12:30 開始予定

3

11/16(日)

ギャラリートーク
山内逸三と美術タイルの世界

時 間: 13:30~14:15+質疑応答

講 師: 加藤郁美(日本タイル史研究家/本展監修者)

聞き手: 清水雄也(当館学芸員)

定 員: 20名

応募受付: 10月8日(水) 12:30 開始予定

4

12/13(土)

ギャラリートーク
藤焼の造形について

時 間: 14:00~14:30+質疑応答

講 師: 加藤亮太郎(陶芸家、幸兵衛窯8代目)

聞き手: 岩井利美(当館館長)

定 員: 20名

応募受付: 11月12日(水) 12:30 開始予定

参加費

2のみ1500円(入館料込み)

3 4は無料(別途入館料500円は必要)

応募方法等 (共通)

事前申込制。

Googleフォームにて受付。先着順・1名ずつの申込。

詳細はミュージアムHPをご参照ください。

名古屋モザイク工業 Design Award 2025 受賞作品決定！

タイルを使用した施工事例のコンテスト「デザインアワード2025」。第10回となる今回は、過去最多となる490件の作品の応募があった。住宅部門・非住宅部門において金銀銅賞・入賞・特別賞が選出され、9月12日にウェブサイト上で発表された。

*全受賞作品はウェブサイトにて紹介。

<https://www.nagoya-mosaic.co.jp/designaward/2025.html>



住宅部門
金賞

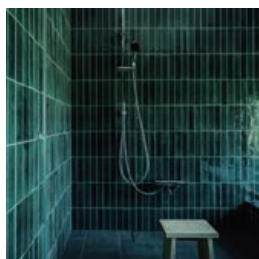
阿品の家
ure 合同会社

設計 ure 合同会社
撮影 足袋井写真事務所 足袋井竜也

審査員コメント

古い木造住宅の小屋組を四角く切り取って面として見せることによって、周囲にある白く反射するタイルの壁、黒い木板壁、ベージュの床などの一つひとつの面が、互いに独立した要素として組み合わせることを強調したインテリアが生まれている。一つひとつの素材がもたらす空間への影響を重視したデザインであるとともに、それらが全体として調和しているところが素晴らしく、金賞に選ばれた。

(大西麻貴氏)



非住宅部門
金賞

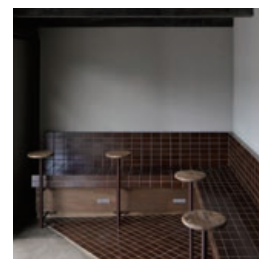
n'estate Kyoto-Arashiyama
株式会社SNARK

企画・開発 三井不動産レジデンシャル
プロジェクトマネジメント GOOD PLACE 金子博宣 松本恵理子
設計 株式会社SNARK 山田優 嶋貫真子
施工 株式会社ヴィーコ 坂本直樹 太田貴之 撮影 志摩大輔

審査員コメント

古民家を一棟貸しの民泊とカフェへと再生し、カウンターやベンチ、縁側にタイルを配することで新旧の質感を調和させている。木構造や庭との関係を大切にしながら、タイルがもたらす均整と清潔感が現代性を加え、利用者に心地よい滞在体験を提供する。単なる保存ではなく、生活に根差した新たな価値を宿すリノベーションとして、地域文化を継承しつつ未来へつなぐ意義が高く評価できる。

(谷尻誠氏)



審査員総評で言及されているように、全体的にリノベーションの作品が目立ち、住宅・非住宅部門のいずれもイノベーション物件が金賞を受賞した。審査員長の大西麻貴氏は、タイルが単体で使われるのではなく、木や石など他の素材と組み合わせることで、印象的な空間を作り上げていると評価。リノベーションにおいては、「時間を重ねた力強いテクスチャとともにタイルが空間に入ることによって、新しいものと古いものとを自然とつなぐことができる」と分析した。

今回は特別賞も多く選出された。集合住宅賞、環境空間賞、外壁大判タイル賞、ストーリー賞、商店建築賞、パブリック賞、タイル×アート賞があり、そのバリエーションが、タイルの多彩な表現や用途を示している。ちなみにパブリック賞は、近畿日本鉄道(近鉄)の大阪上本町駅。ウェブサイトには、最終審査まで残ったファイナリスト優秀作品(住宅部門16作品、非住宅部門12作品)までを紹介。店舗や宿泊施設なども多く、実際に訪れてその空間を体感してはいかがだろう。



パブリック賞
(特別賞)

大阪上本町駅
株式会社大林組
一級建築士事務所

撮影 大日フォスタジオ 山川高弘

デザインアワード2025 受賞作品展とタイルの展示会を同時開催

タイルと創るアイデンティティ展 10月29日(水)~31日(金)

新商品の展示や、CERSAIE速報など各種セミナー、ワークショップほか、デザインアワード審査員によるトークセッションなど数多くの企画を用意。
※参加の際は特設サイトより要予約。

時間 10:00~18:00 (最終日のみ14:30まで)
会場 アニヴェルセル表参道 4F(東京都港区北青山3-5-30)
【東京メトロ表参道駅A2番出口より 徒歩1分】
入場料 無料

詳細およびセミナーの予約は特設サイトを参照 <https://www.nagoya-mosaic.co.jp/nmnews/event/stile.html>